

五

前に私は、スザンナの學校に居つた頃、二つの要點に觸れたと云つたが、實はあの時に三つあげて置くべきであつた。しかし、今云はうとするこの第三の要點は、これを如何に高く又低く評價しやうとも一度回顧するに至れば、兎に角これは人生に於て唯一無比のもので、従つて誰でも之を他のものと同列に置く事は出来ないものである。

私は、あのスザンナの陰氣な教室で、即ち、また、戀を知つた。しかも私があの教室に初めて這入つたその瞬間、因つて私の四才の時である。この初戀！これを讀む人が誰か笑はない人があらう！しかしまた誰か何處其處のアシナとかマーガレットとかを思ひ浮べない人があらう！その人達が嘗つては星の冠を載いて、空色の或は晨の貴金色の衣を纏ふてゐる様に美しく思はれた、その姿を！、そしてそれが今おそらくは、——その反體の姿を委しく畫く事は婦

徳をけがす事であるからこれは止めて置かう——！
しかしまた、誰か斯う告白しないものがあらうか。
「あの當時は、私は舞ふが如くに、浮世の樂園の蜜のうてなを傍を摺れ違ひに通り過ぎた、實にあんなり速いので酩酊する事は出来なかつたが、しかしその氣高き晨の香を吸ひ込むだけの充分の時はあつた。」と。

あの美しい五月の朝、私は今思ひ出しても微笑まざるを得ないが、この日私は初めて學校に送られた尤も、とうから定められてゐたのを、その日が幾度もかへられて延び／＼になつてゐたが、つひに、自分の家をはなれて學校に行くと云ふ私にとつては大事件の日が決定したのであつた。「坊ちゃんは、きつと泣くでせうよ。」夕方にメタ(同居人の一人)は恰も未來を知つても居るかの様に、神巫の様な風に點頭きながら云つた。「いや、坊ちゃんは泣きはしませんまい。が、寢坊をするだらうよ。」と隣人オー

ルが答へた、「いや、坊はなか／＼強いのだ。朝も、ちやんと間に合ふ様に寢床を出る。」とオール家の氣のよい老人が言葉を挿んだ。またこの老人は附け加へて云つた、「私はいゝものを持つてゐる、が、もし坊やが明日の朝、七時に、ちやんと顔を洗つて着物を着替へて、私の戸口の所へ来る事が出来たらそれを上げやう。」と。私は正七時にこの隣人の所へ行つたをして褒美に小さな杜鵑を貰つた。私は七時半迄は元氣よへ、犬のモツプスと遊んだ。七時四十五分になつたら心細くなつて来た、然し八時頃になつてまた全く男らしくなつた。何故ならこの時にメタが這入つて来た。私はあのヨハンバールホルンの、玉子を生む牡鶏の繪のついた、新しい入門書を註、ヨハンバールホルンは十六世紀頃の印刷業者で自ら教育界の新人を以て任じ、盛に改革をしたが、多く改悪となつた、この入門書の表紙の繪は初め牡鶏メンドリだけであつたのを、この人が卵がなくはないけいなとて卵を書いた、それはまだ善かつたが鶏の距が短いとて之を長くした、そこで丁度牡鶏オンドリの様になつてしまつた、即ち此處では卵を生む牡鶏と云ひ、この改悪せる入門書を諷してゐるのである。

小脇に抱へて元氣よく出掛けて行つた。母は私を晴れがましく入學させるために、一緒に來て呉れた

犬のモツプスもついて來て呉れたので私は全くの孤獨でもなかつた。知らぬ間に私はスザンナ先生の前に立つて居た。先生は校長の椅子に座を占めて、私の頬を爪で弾き、私の髪の毛を撫でた。私の母は、大に元氣を出して嚴格な音調で私によく勉強せよとか、先生の云ふ事を聽かなければいけないとか注意を與へて、復た私が氣弱くならないために、急いでサツサと出て行つてしまつた。モツプスは何方に附かうかと暫く決しかねた様子であつたが、遂に母の方について行つてしまつた。私は金紙で出来た聖者の像を贈物として貰ひ、それから、席が割り當てられた。此處に私はブン／＼、ズン／＼とやかましく唸る、子供と云ふ蜜蜂の巢の中に編入せられた。

この子供達は私の入學の手續を面白がつて、また授業がこのため中絶したのを喜んで、私を眺めてゐた。私は皆にジロ／＼見られてゐると云ふ事を直觀したので、暫く顔を上げ得なかつた。遂に私は顔をあげた。その時、私の最初の一瞥は一人の背のストラリとした青白い顔をした女の兒の上に落ちた、この子は丁度私の向側の席に居た。名をエムリーと云つて敎會書記の娘であつた。一種情熱的の戰慄が私の全身

に起り、血が心臟めがけて突進した。しかし、恥しさの感じが私の最初の氣持と混つて、私は直ぐにまた眼を床に投げた、何となく悪い事でもした様な氣がして。この時以來、エムリーは最早や私の心の中を去らなかつた。此れ迄恐れて居つた學校も、今は私の好きな場所となつた。それは私がエムリーに會へるのは本當に學校でだけであつたから、それ故日曜日や祭日は全く嫌になつた。エムリーの事さへなければそれこそ大喜びで休むのだが、これあるために今は前にお休みを楽しんでその喜びと同じ位、厭になつた。どうかしてこの子が缺席でもすると私は實に悲しく思つた。私が行く所、私が居る所、到る所に彼女の姿が目の前につちらく。私が一人ポツチになると、幾時でも私はひそかに「エムリー」「エムリー」と名前を口に出して云つて見ていつまでも倦なかつた。取分け、あの眞黒な眉、あの大變に紅い唇はいつも眼の前にチラついた。之に反して私は實際その當時に彼女のもの、ごしがそれ程私の眼についてたかどうか今思ひ出さない。しかも後年になつてはこのもの、ごしの方が遙に大切な事であつたのだが。

扱私には、まもなく學校中で一番勤勉な生徒、一番

よい生徒と云ふ賞讃を克ち得た、これは解り切つた事であるが。(日曜祭日は嫌ひ、學校へ行くのが何より好きと云ふのだから、)でも私には少し妙な氣がした、と云ふのは私を學校へ行かせるのは入門書でもなく、讀み方も早く覚えやうためでもなく、又まめくしく綴りを覺えたいたためでもない事を、私は自分でよく知つてゐたから。

誰にも、またエムリーにも、私の心の中に起つてゐる事を氣付つかれない様にと私は骨折つた。私は自分の祕密をさとられまいと思つて一生懸命になつてエムリーを避けた。皆が一緒になつて遊戯でもする様な時には私はエムリーに對して何か親しみをあらはすよりも、寧ろ反つて敵意を示した。私はせめて一度でも觸れて見たいために、彼女の後にまはつて髪の毛を引張る、それも嫌疑を引き起さないために私は、いやと云ふ程ひどく引張つて、彼女に苦痛をあたへる様にした。

ところが、いよ／＼天性が力づくよく道をひらかれたそれはあまりひどい試験をうけたから。と云ふのは外でもない、ある日の午後、授業が初まる前、子供達はそろ／＼と教室に集つてくる、スザンナ先生は

まだ心地よい晝寝から目が覺めぬ、この時の教室は謂ゆるドタバタ時間で實に大騒ぎであるが、此の時私にとつて一つの最も悲しむべき光景が起つた。エムリーが一人の男の兒に虐められてゐる、その男の子は私の一番仲直しの友達だ、彼は、エムリーを甚く引張つたり捻つたりした。見てゐる私はますます高まつて來る人知れぬ憤慨の思をチツトとおさえて、まだしも忍んでゐたが、つひに彼はエムリーを片隅に追ひ込んだ、今度また引張り出した時、エムリーの口から血が流れてゐる、おそらく彼が何處かで引搔いたに相違ない。此處に於て私はもはやこれ以上我慢が出來なくなつた。血の光景が私を狂暴にした。私はこの男の子に襲ひ掛り床の上に投げ倒し、打擲のかぎりをつくして二倍にも三倍にも仕返しをした所がエムリーは私が何時迄たつても止めないので私に感謝するどころでなく、かへつて自分の敵のために助けを叫んだ、そこでエムリーは響を打つ私よりも寧ろ虐められた敵の方を愛してゐると云ふ事を期せずして露はしてしまつた。この騒ぎにスザンナ先生は微睡が覺めて急いで室へ來た。彼女としては無理もない事だがブツ／＼云つて大いに不機嫌で私の

突發的の暴行に對して嚴しい辨明をせまつた。私はつかへ／＼吃りながら辨解したが、自分にも何の事やら解のわからない道理にも合はぬ事を云つた。この私の臍の緒切つて初めての「婦人保護」に對する返禮としては私はまことに粗野な折檻を受けたのであつた。

この愛情は私の十八歳の時迄つゝいた、もとより種々の段階を通つたが。私はまた、この自叙傳の中に幾度か此の點に觸れねばなりませんまい。

七

私は幼少の頃から、人並みはづれて想像力が強く働く子であつた。私は晩方、寢床に寝かしつけられると幾時でも私の頭上の桁がウネ／＼と動き初めて來る。室の隅と云ふ隅、角と云ふ角からは、怪物の顔が眼をむいて來る。また、晝の間、私が馬のかはりに乗つて遊んだ棒などは、私には誠に親しみあるのであるのにその棒も、さては、机の足も、否自分の着てゐる夜具の花模様や、唐草模様までが、皆、縁も由縁もない物の様に思はれて、恐怖の念を起させる種となつた。私は、子供のもつ恐怖には二

つの種類があると思ふ。其一つは殆ど例外のない位にどの子供にもあるもので、取りとめのない一般の恐怖、今一つはこれよりも更に程度の高い恐怖である。この後のものはその恐ろしい幻想が切つた様にクツキリとした形をとつて現實し、しかも子供の頭にその幻想が實際客觀的に有るものと信じさせるのであつて、この二種の恐怖は區別して考へる方がよい。扱この初めの方の恐怖は私の弟も持つてゐた弟は夜は私の側に寝たがしかし彼は眼をつぶればすぐにグツスリ朝迄寢込んでしまふのが常であつた。

後の種類の恐怖は實に私一人で苦しんだのであつたこの恐怖のために私はなかく寝られない、折角寢たと思ふと、すぐに怖えて眼をさまし眞夜中によく「助けてくれ」と叫ぶ様な事もあつた。この幼時の恐しい幻想がいかに深く私に印象されてゐたかは次の事を考へてもよくわかる。即ち私がひどい病氣をするときつとその幻想が昔のまゝの強さで現はれる、殊に熱でうかされて意識が朦朧となる様な時に、その幻想は、後年に得た多くの印象を驅逐し、その武器を奪ひとつて、昔のまゝの姿にあらはれて來るのであつた。もつとも、この想像力が時として異常に

寧ろ病的に働く事もあつた。と云ふのは私の醜い人を見るとうづつとしてしまふ。——私の弟などはそんな人にあつても怖がるどころか、かへつて面白がつて笑つてその様子を真似たりするの——。例へばこんな事もあつた。三角なりの顔をした死人の様に蒼ざめた小柄な僮僕の仕立屋、しかも度はづれて長い耳をして、おまけに其れが眞赤で透き通つてゐる、この人が私の家の前を通ると、私は幾時でも叫びながら家に馳せこんだ。時には怖いあまりに「悪魔の使が」とどなつて逃げ込む、すると、この仕立屋が大變に腹立て、「この馬鹿小僧」とどなつて追ひ馳けて來て「お袋が家でそんな事を云へと教へるんだらう」とえらくブツ／＼母を罵つて來る、この時などは私は殆んど、もうそのまゝ死んでしまふ程に怖しかつた。

また私は骨と云ふものを見るのが大嫌であつた、庭などで、ごく小さい一片でも見付けやうものなら私はすぐ之を埋めてしまつた。否、後にスザンナ先生の學校に行く様になつてからも入門書の中に「骨」と云ふ字があると之を爪で削りとつてしまふ、それは字を見てさへ、あの、胸のわるい品物がマザ／＼

と眼のまへに浮んで来て、不快な、微くさい形が、其處にある様に思はれたからであつた。この反體に私はまた風が垣根越しに吹きおくる薔薇の葉一枚を見て、また外の子供がバラの花を見た時と同じに否それ以上に嬉しく思つた。そしてまた、チューリップ、百合、櫻桃、杏、林檎さては梨など云ふ言葉を聞いた丈でもすぐ私はそれ／＼に春に、夏に、秋に、直接その時の氣分になつてしまふ事が出来た。それであるから、入門書の中にかうした文字が出て來ると私は他の所よりも大きな聲で喜んで讀む。運わるくかゝる課が私の讀む番にあたらないと、私は幾時も残念で堪なかつた。

遺憾な事には、この世では我々は廓大鏡を用ふる場合よりも縮小鏡が必要な場合の方がズット多いがあの華やかな幼年時代も亦この例にもれない。馬が人間を尊敬するのは其の眼の構造上から、人間が巨人の様に見えるからである、よく世人が云ふが、特に想像力がつよい子供に於てはまたこれと同じ様で一粒の砂粒でも、外でもない、たゞ、これが越え難い大きな山の様に思はれるために、子供はその砂粒のまへにデット立ち止まる。かゝる場合を考へて

見ると、物、そのものの大小は、標準にはならないので、その物が投ずるその影がどうであるかが問題である、だから父親が可笑がつて笑つてゐる事を、一方に息子はその同じ事に對して地獄の責苦になやむと云ふ様な場合がよくある。つまりそれは、父と子と事物を量るその秤が兩方、根本的に異つてゐるからである。それ故、事それ自身はたとひ滑稽な出来事であるにせよ（私には主觀的に重大事であつたとすれば）それが實際、教育上、一つの重要な點に光を與へる事ともなろうと思ふ。と云ふのはかう云ふ事があつた。

ある日、晝飯時に私はメリケン麵麩を買ひに行かされた。パン屋の伯母さんがその時パンを呉れた序に、何でも片附け物をした折、何處からか出て來たものらしい一つの古ぼけた堅果鉗を、大にキマリを見せて呉れた。私は今迄一度もかう云ふものを見た事も使つた事もないので、あの頬の赤い、眼のバツチリした可愛らしい人形と同じ様なつもりで、兎に角これを受取つた。喜んで歸途につき、その堅果鉗を新奇の愛好物として柔しく胸に抱きしめた、フト氣が付いて見ると鉗は大口あいてゐる。私が愛がつ

てやる御禮に凄しく白い齒をむき出してゐる。――

この時の私の驚きはどんなであつたらう。――私はキヤツと叫んだ。私は何かに追ひかけられた様に夢中で向側へ馳け出した。しかしこの時私はこの怪物を放り出してしまふと云ふ勇氣も考へもなかつた。私が馳け出すとその動作につれて或は口を閉ぢ、またカット口を開く。だから私はこの鉗が生きてゐると考へざるを得ない。半死半生の有様で私は家に馳け込んだ。此處で私は先づ嘲笑はれ、又いろ／＼理由を云つて聞かされ、とう／＼終りには叱られた。しかし何にもならなかつた。この怪物が私に害はないと云ふ事は解つたが、どうしても仲直りは出来ぬ。「近所の子供にやつてしまへ」と云ふ許容が出て初て胸撫で下したのであつた。私の父はこの話を聞いて「こんな事をする餓餽は二人とありやしない」。

と云つた、本當にそうだ、恐らく、夕暮方になると堅果鉗の親類共が早くも既に床と云はず天井と云はず現はれ出て種々の顔をして見せるのを見た子供はたしかに二人とはなかつたであらう。

私のブツ／＼湧いて居る想像は、夜半夢見る時にその極點に達した。それは前後七回繰り返へされた

程で全く私には奇怪至極なまた強い印象をのこしたその夢と云ふのは私にはかう思はれた。神様が――日頃神様の事はよく聞かされて居たが――天地の間に一本の繩を張つて私をその中に入れて、神様御自身は私を揺ぶるためにその側に立つていらつしやる扱扱は、休む事なく慰ふ事なくめまぐるしい速さで彼處此處を飛びまわる。今や私は高く雲の上に登り、髪の毛が風に靡く、私は瘡癩的にシツカリと身を支へ眼をつぶる。と思ふと私は再び地上に近くなり、黄色い砂や、赤い、白い小石が手に取る様に見えるイヤ、爪先がもう地に届きそう。そこで私は飛び出そうと思ふが決心しかねてゐるその中に、またもや高く上つてしまひ、たゞその繩にしがみつくより外仕方がなくなる。そうしなければ私は轉げ落ちて粉微塵になつてしまふから。

この夢のあつた週間は恐らく私の幼年時代の最も怖い時期であつたらうと思ふ、何故なら、この夢の思ひ出は其の一日中去らず、晩方になつて厭でも無理に寝かしつけられると、「またあの夢を見せぬか」と云ふ不安を寢床まで、否、眠の中まで持つて行くので、またその晩もその怖い夢を見る様になるのは無理のない事である。しかしこれもその後、日の經つとともに次第にその力が弱くなつて行つた。